

# 戻り梅雨

岸川瑞恵

約束の朝を迎えた。

レースのカーテンから夜明けの白い光が漏れて、麻子の枕元まで届いている。お天気が気になって布団を抜け出し、急いで窓の外を確かめた。

昨夜からしとしとと降り始めた雨はまだ静かに続いているが、空を覆った雲は僅かに朝の光を孕み、麻子が出る頃にはすっかり上がるのではないかという、小さな望みを持たせてくれていた。

天気予報が例年になく早い梅雨明けを伝え、その後は予報通りに夏空が続いている。雲一つない青空が連日続き、ぎらぎらと照り付ける太陽に、動けばねっとり汗が纏わりつく。誰もが梅雨明けを疑わなかった。雨の気配など微塵も感じさせなかったのに、約束の前日になって降り始めた雨が疎ましい。

わざわざこの日のために麻子は着物を詠っていた。

紺地にワイン色の小さな井桁文様が、全体にバランスよく散った反物は、控えめな地色に抑えた赤色が一見単純で、面白さには欠ける。だが、店の鏡の前で反物を肩にかけて時、不思議なほど上品な明るさを醸して、麻子は一目で惹かれた。よくお似合いですよ、と店の主人が言った。

細面で色白の麻子にはお世辞半分に聞いても、どこか納得できるものがある。店主が渋いからし色の帯をさりげなく合わせると、しつとりと落ち着いて全てが調和よく揃い、自ずと心が浮き立っていた。

麻子にとっては高額の買い物だったが、間違はなく自分を引き立たせてくれると確信していたものがある。帯揚げや帯締めまで合わせて調達をし、急いで仕立てても

らった着物であった。

今日会う人とは、たかだか二時間程度のほんの短い時間を共にするだけであろう。そのたったひと時の約束のために、散財をしてしまったのである。日頃から何事にも慎重な麻子にしては珍しいことだった。和服で行こうという突然の思い付きもあまりに唐突だった。いつになく冷静な判断ができていなかったと思われる。

ただ、この一か月、自分では平静をよそおっているつもりでも、ふとした時に口元がほころび、今日の楽しみを想像すると、やはり気持ちの深い部分では浮かれているのだろう。そんな麻子をこの雨が、年甲斐もなく、とあざ笑っているかのようにも思う。

昼を回っても雨は止むことを知らず、和服で出かけるのを迷ったが、麻子は思い切って新調した単衣の小紋に袖を通した。

二人の子供たちはそれぞれに家庭を持って家を離れ、共に暮らしていた夫も五年前に旅立った。以来麻子は独り暮らしである。元々おおらかな性格なのか、傍<sup>はた</sup>から見ると自由気ままに一人を楽しんでいる様子だが、還暦もとづくに過ぎて、そろそろ古希の声<sup>こゑ</sup>が聞こえ始めると、老いは麻子にも確実に近付いている。

立ち上がろうとすると「どっこいしょ」と、自分を鼓舞する言葉が口に出る。ぼんと置いた老眼鏡を探して部屋中うろろろするのは日常茶飯事。つい先日は火急の連絡で「急いで回してください」と書かれた閲覧板を、うっかり二日も止めていた。あちこちで頭を下げ恥もかき、齢を重ねた独り者の頼りなさを感じながら暮らしているのである。

そんな彼女が心を躍らせて、これから会おうとしている相手は、漸く三十を越えたばかりの、麻子の子供たちよりもはるかに若い青年だった。

彼はひと月前、麻子がうっかり駅のホームのベンチに置き忘れた荷物に気付いて、追いかけて手渡してくれた男性である。

あの日、麻子はK大附属病院に入院している友達を見舞った。幸い元気そうだったことと、二人部屋の片方のベッドが空いていたことで、久しぶりの会話は憚ることなく弾んだ。病室に一人は寂しいと引き留められて、つい長居をしてしまっていた。

病院を出ると陽が傾きかけていたが、独り暮らしの麻子も急いで帰る必要がなく、駅へと向かいながら途中の商店街へ立ち寄った。昼下がりに病院へ向かう頃は、夕食の支度の買い物をする主婦が目立ったが、今はパート帰

りの主婦や部活を終えた高校生などが、店が並ぶ狭い通路を行き交っている。店員の力強い呼び込みの声も交じって、その日最後の活気を見せていた。

麻子は賑わいの中にとけ込んで、新鮮な魚や野菜に足を止め、雑貨店で日用品の補充をし、気付けば食材が入ったビニール袋や嵩張る日用品の紙袋で両の手は塞がれている。すっかり日が暮れた駅に着くと俄かに疲れが出て、ホームで電車を待つ間、ついベンチに腰かけた。

電車がホームに入って麻子が立ち上がった時、その中の一つをうっかりベンチに置き忘れてしまったのだ。それに気付いた若者が麻子を追いかけ、閉まりかけたドアの隙間からタッチの差で滑り込んで、彼女にこの忘れ物を手渡してくれたのだった。

不意に声を掛けられて目の前の青年を見上げると、彼が身に付けた真っ白いポロシャツが、何よりも先に麻子は目に留まった。折り目がまだ付いたままで、体に馴染んでいない様子から買ったばかりのものだと窺える。着るものに神経質なほど気を遣う息子の洋一と比べて、そのような細かいことには頓着しないのであろう若者に、麻子は親しみが湧いた。

洋一は、高校生になった頃から外見を気にし始めた。毎朝、入念に顔を洗うと自分で買ってきた男性用の化粧

水をつけ、ドライヤーで短い髪を整えた後は鏡に向かって右を向いたり左を向いたり、その出来栄を確かめる。家族にひんしゆく響盛をかきながらも、朝の洗面所を独占していた。

新しく買ったシャツも、わざわざ洗濯機で一度洗って折り目を消し、よれよれと皺の残る状態にしなければ身に付けなかった。買ったばかりで体に馴染まないシャツは、袴のように構えて見えて、格好が悪いと頑固に嫌った。洋一の性格が男の子にしては繊細で、麻子はこのことが常に気になっている。それだけに、小さなことに拘りのない様子の青年に、頼もしい印象を麻子は受けたのである。

若者は紙袋を手渡すと笑顔を見せて、「それでは失礼します」と軽く会釈をして次の駅で降りた。忘れ物を麻子に手渡そうと追いかけた結果、彼は行先の違う電車に乗ってしまったのだった。ホームで別の電車を待つようだ。そのことに気付いた麻子もまた、咄嗟に彼の後ろを追って電車を降りていた。

青年は自分の後を追って下車した麻子に戸惑いを見せた。しかし、一番戸惑ったのは麻子自身だったろう。青年につられてホームに降りたものの、その先どうしたらよいのか分からない。あの時の行動は今振り返っても滑

稽で、麻子自身うまく整理ができないでいる。彼の親切な行いが素早く、日頃から身に付いたものだと感じた時、気持ちの良い感情が湧いていた。都会の中では自分が生きていくだけで精いっぱい、他人のことにまで気を配れないのが今の時代の人々だろうと麻子は思う。

彼を追いかけるなど夢中でしたことではあったが、確かに思い切ったことをしたとも思う。車内でお礼は言わずなのに、磁気に引き寄せられるように彼に付いて降りたのは何故なのか。若者の思いがけない親切が麻子に心地よいものを生じさせ、迷惑をかけたままで自分が先に帰ることが、麻子にはできなかつた。だから彼の誠実な温かさに応えなければと、自ずとそんな感情が湧いていた。強いて言えば、もう少しこの青年と話をしてみたい、そんな思いも強く持っていたのかもしれない。外灯がともった歩道を勤め帰りの人々が足早に駅舎へ向かっている。その中を逆らうように二人は改札口を出た。

「その喫茶店に入りましょうか」

目に付いた駅の近くの店へと麻子が先に立って歩いていき、ドアを開けた。小さな扉からカランコロンと店内に響き渡るようにドアベルが鳴って、二人の入店を大げさに知らせている。

二人は入り口近くのテーブルに向かい合って座った。実は麻子は、自分から誘って初対面の男性と二人で喫茶店に入るなど、これまでの記憶を手繰っても心当たりのないことだった。この齢になって初めての体験だったかもしれない。夢中だったとはいえ、冷静になってみて緊張が一度に拵がった。

しかも電車を降りてここへ来るまでに、麻子が手にしていた魚の生臭いビニール袋や、日用品で嵩張った紙袋などの荷物を、ごく自然に彼が持ってくれていた。お願いしたわけではなく、青年の優しさが麻子の荷物へと、自然に手を差し伸べてくれていたのだ。

不思議なことだが、彼の側にいると麻子はほっとする安心感があった。夫を亡くして以来、忘れていた感情である。いつもなら人に荷物を持ってもらうことなども、遠慮が先になつてできなかつたが、彼になら、心の中の垣根を飛び越えることができるのだった。

改めて礼を言う、特別なことをしたわけではないと言つて、彼は恥ずかしそうに頭をかいた。

何を話せばよいのかと、注文したコーヒーをゆつくり口に運びながら、麻子は会話の糸口を探す。どんな仕事をしているのか、一人暮らしなのか、趣味は？ など、聞きたいことは沢山あるが、会ったばかりの若者に、どこ

まで立ち入ってよいのか分からない。

青年もまた、誘われるままに喫茶店まで付いてきたが、積極的に話をするタイプではなかった。この沈黙を耐えがたく感じてはいたが、年配の女性に対する話題が彼には見つからない。落ち着かない様子で何度もカップを口に運んでいる。

そのためお互いの会話は膨らまず、ぼつんぼつんと途切れがちで二人の間はぎこちない。だが、そんな彼に対して、麻子は何故か悪い印象がなかった。むしろ、今時こんな真面目な青年がいるのかと、世間に染まっていないう純粹なものを感じ、反対に好感さえ湧いてくる。

洋一が学生の頃は、付き合う女性の名前が数か月ごとに違った。どんな気持ちで付き合っているのか心配でもあったが、今時の若者は自由でいいなあとも麻子は感じていた。麻子が同じ年齢の頃は、二十歳を過ぎてても尚、親は厳しかった。門限があり、少しでも遅ければ父親が玄関の上がり框で仁王立ちになっていた。今までどこで何をしていたのか、誰と一緒にいたのか、なぜ連絡をしてこないのだ、と長たらしい説教が始まるのである。周りが盛り上がっている時に、席を立てて家に連絡をするなど、その場の雰囲気水を差すようなことができるわけがない。親だってそのようなことは分かっているはず

なのに、麻子の家では親は絶対で、反論などできなかつた。娘を結婚させるまでは親の責任とばかりに、麻子の行動に目を光らせていた。そんな時代だったのだ。

目の前の若者を見ると、どんな青春を過ごしてきたのだろうと知りたくなる。百八センチは優に超えているだろう上背は、がっしりとしていて、学生時代はアメリカンフットボール部がびったりしそうな体格だが、遠慮がちな小さな声からは、その逞しさは窺えない。そればかりか笑うとえくぼができ、一瞬幼い表情さえ覗かせる。黒ぶち眼鏡が冷たくも見えるが、眼鏡の奥の小さな目は只々優し気で全てが柔和であった。

顔を赤らめ蚊の鳴くような声でもぞもぞと話す彼を、穴のあくほど見つめていたいと、小悪魔的な感情が湧いてくる。麻子自身はまだ気付いていないが、こうして若者に接していると、刺激のない自分の日常の暮らしを忘れていたのである。なぜか心が軽やかになってくるのである。

どちらかと言えばアナクロな考えの麻子にとって、今を生きる若者を理解することは難しい。青年にとって麻子は行きずりの年老いたおばさんに過ぎず、この喫茶店を出た瞬間忘れ去られる存在であろう。そのように感じた時、大きな寂しさが拡がった。今日の偶然の出会いを

この先も大切に、この日限りにしたくないと思った。日頃は忘れられていても、ふとした時に今日の出会いを彼が思い出してくれたら嬉しい。「あの日、こんな女性がいたな」と、何かのきっかけで若者の心の奥深くから麻子が甦ってくるような、そんな印象に残る楽しい出会いにしたいと思う。そのため彼の心に染み入る話が見たいとも思った。しかし若者に響く言葉などすぐには見つかるはずもない。沈黙に息苦しさを感じた時、空気が裂くように彼のスマートフォンが鳴った。

「先生！」

いきなり麻子にまで聞こえる女性の声があった。女性が話す言葉は早口で聞き取れないが、慌てている様子に急を告げているのではないかと麻子は察した。電話を切る。「僕の受け持ちの患者さんが急変したので、これから病院に帰らねばならなくなりました」と告げながら、すでに彼は立ち上がっていた。

早く行ってあげてください、と麻子も慌てて言いながら「一か月後、同じ時間にこの喫茶店でもう一度……」と、自分でも驚く言葉が口をついて出ていた。「えっ？」と、彼は一瞬立ち止まったが「分かりました」と言った。青年は麻子の友達が入院しているK大附属病院の、まだ若い医師だったのである。若者のこれまでの優しく落

ち着いた行動を思い起こすと、何か腑に落ちるものがあった。このような人にこそ立派な医師になつてもらいたいと、一人残った麻子は冷めたコーヒーに手を伸ばしながら思った。

お互い名前も知らないまま、一か月後の約束をしたことが不思議だったが、彼が慌てて席を立った瞬間、この青年のことをもつと知りたいという思いと、この先ずっと青年の未来を見続けていけたら、という願望が麻子を支配していた。

若者がいなくなった席に、たった今まで彼がいたことが信じられないほど懐かしさが湧いていた。

電車を降りると、麻子は見覚えのある喫茶店へと足早に歩いた。時刻は約束の時間より三十分ほど早い。まだ来ているはずがないのに、何故か心が急いている。急げば時計が早く時を刻んでくれるわけでもないが、この一か月間、待ち望んだ楽しみに喜びが一度に溢れ、自然に体が動いていた。

店内は疎らで、一か月前と同じ入り口近くの席が空いていた。

コーヒーの香りが漂う空間も、マスターの「いらっしやいませ」の声も、静かに流れる音楽も、全てがあの時と



変わらない。袴のようだったポロシャツは、もう体に馴染んだ頃だろう、そんな空想をするだけで麻子の心はずんだ。

彼女の疎らな白髪や血管が浮き出た手は隠しようがなく、青年から見れば紛れもなく高齢者であるはずなのに、彼はそんなことを気にする様子が全くなかった。このことが麻子に自分の齢を忘れさせ、若者と同時代を生きているような錯覚を起こしていたのかもしれない。

「お連れ様から伝言を預かっております」

マスターが水をテーブルに置きながら、麻子の気持ちに割って入った。

「少し前にお電話があり、急な手術で来られなくなつたとのことで、丁寧にお詫びをお伝えくださいとのことでした」

マスターが淡々と告げた。

麻子は体よく断られたか、と一瞬若者を疑った。しかし、それを否定するかのようには、慌ただしい様子が電話からも伝わってきていた、とマスターは言い、大変申し訳なく思つていらつしやるようでした、と深く沈んだ麻子の気持ちを汲んで、静かに言つた。

「それから、あと一つ……」と、マスターは言葉をつないだ。

「初めて会つたあの日、大したことをしたわけではないのに、『有り難う』と言つてもらつた言葉が不思議なほど心に染み入つて、今も時々思い出されます、と言われていました」

麻子がごく当たり前のように口にしたお礼の言葉が、彼の心に根差していたことが意外であつた。若者の行動が自然な思いやりに満ちていて、それに対して何げなく発した言葉であつたが、青年は麻子の気持ちをしっかりと受け止めてくれていた。

ひと月前の突然の出会いは、単調な麻子の独り暮らしに明るい色を添えた。ホームで渡せなかつた麻子の忘れ物を、車内まで追いかけて手渡してくれた若者。まだ体に馴染んでいない真新しいポロシャツを、気にすることもなく身に付ける大らかさ。青年の人柄を麻子なりに想像すると、これから親交を深める楽しみが膨らんできて、再会を約束したこの日が楽しみだった。

今、勝手な空想が静かに消えていくのを感じるが、この一か月間が麻子にとって楽しい日々であつたことには違いない。幾つになつてもきつかけさえあれば、人は平凡な生活の繰り返しから抜け出してみたいという、潜在的な願望があるのだろうか。それは、恋とか愛とかという類のものではなく、人生の坂を下つていく者に与えられ

た、心を優しく揺さぶる時間なのかもしれない。

マスターが淹れてくれたあの日と同じコーヒーを、麻子は独りでゆっくり味わった。この街へ再び来ることもないだろうと思うと、もう少し店の雰囲気浸っていたい。一か月間の麻子の想いを全てこの店に置いて帰ろうと決めた時、麻子の携帯電話が鳴った。

「母さん、この雨の中どこに出かけているの？」

洋一からだだった。皆で一緒に夕飯でもと、すき焼きの材料を買ってきたのに、と残念そうに言う。

「あら、和子さんや子供たちも一緒なの？」

「そうだよ。皆で来たんだよ」

「合鍵持っているでしょ？ 直ぐ帰るから入って待っていて」

「もう入っているよ。今、彼女が夕食の支度をしているところだよ」

思いがけない洋一家族の訪問だった。

洋一が勤める会社では週一回、残業をしないで帰る日が定めてあった。そんな日は時々家族で来てくれる。嫁の和子の心遣いだらうと、麻子は有難く思う。

店を出ると雨はまだ止む気配がなく、静かに降り続いていたが、薄い雲は心なしか明るく、一か月前と変わらないう時間なのに日暮れが遅くなり、季節が夏へと移りつ

つあることを感じる。

店を出て傘を開こうと空を仰いだその瞬間、突然一筋の風が麻子の頬をなでるように優しく吹いた。一瞬のことで、はっとした時はすでに風は通り過ぎていたが、全て店に置いてきた麻子の想いを、この風がもう一度呼び起こしたように麻子は感じた。無理に忘れなくても良いのだよ、と言われた気がした。

小さな出会いがきっかけで長く続く付き合いもあれば、その時限りの出会いがあっても良いと、風が言っているかのようにだった。暮らしの中でふと思いつくことがあるかもしれないし、すっかり忘れてしまうかもしれない。こうであつたら良いとか、こうなりたいたいとか、あれこれ考えるより自然な流れの中にいて、その時々小さな変化を感じ取りながら、日常の暮らしを続けることが自然なのだ。麻子は気付いた。

喫茶店での途切れがちな会話も振り返ればそれが二人の自然体だったのだと思う。このように考えた時、心の中が爽やかになって笑みがこぼれた。麻子は足早に駅へと向かった。家路へ向かう足が思いのほかに軽い。

その後、戻り梅雨はしばらく続き、二度目の梅雨明け宣言を聞いた頃、友達は元気に退院し、麻子がK大附属病院へ行くこともなくなった。